



「もう大丈夫。ひ孫さんとも遊べますよ」。腰痛の原因だった腰部脊柱管狭窄症の手術に成功した女性患者(モ)に優しく語りかけた。背中の痛みに加えて一月初旬から足に痛みやしびれが出て、家の中をはって動くのもやっとだったという。「細かな神経や血管を傷つけないように細心の注意を心掛けています」。傷や体の負担が小さい顕微鏡を使った腰椎低侵襲手術を年間六十件、これまでに通算で八百件を手掛けた。

脊柱管狭窄症は、頸椎から背中に向かって伸びた神経を包む脊柱管が加齢などで狭くなり、周囲の背骨や靭帯に圧迫されて痛みが生じる。高齢者を中心に患者数は全国で六百万人といわれる。ストレッチやウォーキングなどの運動療法は予防効果があるが、進行すれば手術が必要となる。「薬やりハビリでは脊柱管は拡大しない。病気が進行

中東遠総合医療センター (静岡県掛川市)

整形外科統括診療部長 浦崎 哲哉さん (54)



女性患者に語り掛けながら、手術後の容体を確認する浦崎哲哉さん

してまひの症状が出る前に、骨や靭帯を削って広くするしかない」

背中側から患部を二・五センチほど切開し、骨と靭帯を削り取る。内視鏡を使うケースもあるが、顕微鏡だと患部を立体的に見ることができ、距離感もつかみやすい。「安全に手術でき、背筋のダメージも抑えられ」という。

神戸市出身。「子どものころから話を聞くのが好きで、カウソセリングで治療する精神科医が目標だった」という。名古屋大医学部卒業後の研修先で、手

先が器用との理由で、外科医を薦められたのが転機となった。整形外科を選んだ理由の一つは「術後の形が確認しやすかった」こと。「傷や変形をきれいに治せば、機能的にも良いことを目で確かめられた」。趣味の水彩画で培った美的感覚も仕事に生かされている。

岐阜県立多治見病院や静岡済生会総合病院などを経て、二〇一〇年から中東遠総合医療センターの前身となる掛川市立総合病院に勤務。椎間板ヘルニアや脊椎椎体骨折などを含めれば年間百七十件の手術をこなす。高齢の患者には、一人暮らしや老介護に追われている人も。「病気になったことで、『今まで通りの生活ができなくなる』と、患者本人が一番危機感を持っている」。手術と聞くと身構えがちだが、顕微鏡手術の利点を丁寧に説明している。退院後の経過診察で「おかげで歩けるようになった」と言ってもらえるのが「励み」という。(赤野嘉春)

顕微鏡手術で腰痛救う

「2017年6月20日 中日新聞より」